



第2期 ひょうご 障害者 福祉計画

一人ひとりが尊重され、
互いへの思いやりとつながりがある中で、
住みたい地域・場所で、
ともに暮らしていける社会

令和4(2022)年3月

 兵庫県



兵庫県知事 齋藤 元彦

はじめに

いま、障害のある人を取り巻く環境は大きく変化しています。ICTをはじめ、テクノロジーが加速度的に進化し、障害者が分身ロボットを遠隔操作しながら、接客業務などを行うこともできるようになっています。一方、そうした技術をうまく活用できない方との間に格差が生じる、いわゆるデジタルデバイドの問題が新たに生じています。

さらに、コロナ禍のなか、障害のある人の社会参加や交流の機会が失われる“社会的孤立”や、生活に不可欠な障害福祉サービスをどのように継続させていくかが大きな課題となりました。

「誰も取り残さない」というSDGsの理念を大事にしながら、障害の有無にかかわらず、誰もが一人の人間として尊重され、社会に参加することで生きがいを感じる。そんな「人に温かい兵庫」をめざしていかなければなりません。

このたび兵庫県では、令和8（2026）年度までを計画期間とする「第2期ひょうご障害者福祉計画」を策定しました。①共生社会の実現、②自己決定の尊重、③その人が望む生活（社会参加の機会）の尊重を基本理念とし、「ひと」「参加」「情報」「まち・もの」の4つの分野において、今後取り組むべき施策などをまとめています。

本計画では、5年後の目標を「一人ひとりが尊重され、互いへの思いやりとつながりがある中で、住みたい地域・場所で、ともに暮らしていける社会」としました。

めざす社会の実現に近道はありません。国や市町、障害のある方ご本人やその家族、事業者、関係団体との連携を深めながら、一歩ずつ着実に取組を進めてまいります。皆様の一層のご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

令和4年（2022年）3月

幹太くん!

中学校ともお別れだねえ

木々が芽吹き始め、やわらかな日差しが心地よく感じられる季節になりました。

中学校の先生方、生徒のみなさん、いつも幹太の日々の姿をあたたく受け止めて下さり本当にありがとうございます。

3年前の4月、入学式を終えた数日後、全校のみなさんに幹太の障害のことをお話しさせていただきました。幹太には「自閉症」という障害があり、独特のこだわりが中学校の生活と合わない部分も多いです。成長もとてもゆっくりしているので、みんなの成長スピードについていけず、年齢を重ねるにつれ周囲のみんなとの差も広がってしまいます。そんな幹太が中学校で頑張っているのか…。正直とても不安でした。でも、あの日、真っ直ぐに私の話に耳を傾けてくれるみなさんの姿を観て「大丈夫。きっと幹太はこの中学校で頑張りぬくことができる!」と心から安心できました。

あれから3年、いろんな日がありましたが、幹太は1日も休まず、1日も行き渋ることなく、自分の意思で登校することができました。自閉症に加え知的障害もある幹太がどうしてこんなに楽しくイキイキと学校生活を送ることができたのか、その答えを最近やっと見つけることができました。

幹太には障害があります。でも中学校ではその障害がなくなるのです。それは、先生方も生徒のみなさんも幹太を変えようとするのではなく「どうやったら幹太も参加できるのか」「ど

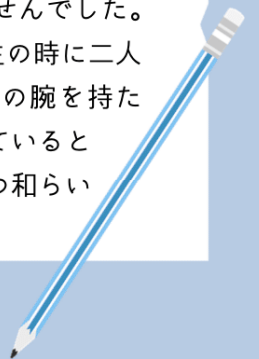
んな支えがあれば安心して過ごすことができるのか」。

いつも幹太の内面に気持ちを向けて下さっているからです。

学校生活の中で次々とやってくる障害も、いろんな方法を考え、その障害を取っ払ってくださいました。これは本当にすごいこと!障害者との共生社会の理想として世界レベルで語られている内容です。そんな周囲の働きかけに、幹太も少しずつ応えられるようになり、自らの意志でいろんなことにチャレンジできるようになっていきました。

幹太は幼少期から運動会などの行事が苦手な中、中学校の体育大会や文化祭は「参加しない」と言っても仕方ないと思っていました。できることだけでもチャレンジしようと頑張った1年生の体育大会の二人三脚で、バランスを崩し大転倒。先生と仲間に支えてもらい、なんとか退場門までは泣きませんでした。教室に戻ってから大泣き、大パニック!私は心の中で「幹太の体育大会はこれで終わったな…」と思いました。でも、幹太とペアを組んでくれた友だちやクラスみんなが、遅くても転んでも文句ひとつ言わず最後まで全力で戦ってくれたことが本当に嬉しく、もし幹太が「もう体育大会はやめておくよ」と言ったとしても何の悔いもありませんでした。

ところが、2年生の体育大会で幹太が出した答えは「二人三脚はやめておく」だったのです。おまけに、小学校から一度もやったことのない大縄跳びに参加するというではありませんか!「一人で跳ぶこともろくにできない幹太が、みんなに合わせて跳ぶことなんてできないはずがない。またみんなに迷惑をかけてしまわないか」と親としては不安しかありませんでした。それでも先生のノートには、1年生の時に二人三脚でペアを組んでくれた友だちの腕を持たせてもらい頑張る練習に参加していると綴られていて、私の不安も少しずつ和らいでいきました。



そんなある夜、幹太が突然「お母さん。体育大会には…そう！長い靴下がある！」と言い出しました。急いで先生からの連絡ノートを開くと、大縄跳びの練習中に縄に引っ掛かって転んでしまったとありました。その時は一年前のことを思い出して怖くてたまらなかったと思います。でも、幹太の出した答えは「やめる」ではなく「どうやったらこの障害をなくすことができるか」ということでした。なんとかしてみんなと一緒に跳びたい！という幹太の強い想いを感じて胸が熱くなりました。そして幹太と相談して、足全体をガードできる長ズボンを履いて再びチャレンジすることにしました。次の日に早速実践！「お！痛くない！！これいいね～(^♪)」と、すっかり安心して、ますます意欲的に練習に励んだそうです。

体育大会の本番、友だちの腕にしっかりとしがみつき、一番跳びやすい大縄の真ん中で跳んでいる幹太の姿がありました。一人だけ長ズボンで手を取ってもらっての参加ですが、そんなに違和感もなくそれが当たり前かのように、周囲のみなさん全員が幹太の頑張る姿をあた

かく見守ってくださいました。みんなの中で頑張っている幹太の姿は、とても堂々としていて自信に満ち溢れていました。

ほかにも幹太の前に立ちはだかる障害を取り除き、頑張らせてもらうことができたことがたくさんあります。部屋割りや活動内容を少し変えてもらうことでみんなと一緒に参加できたスキー学校や修学旅行。地域のみなさんに見守っていただき、みんなの姿をお手本に無事故無違反でチャレンジできた自転車での登下校。「みんなにやさしいルール」でチャレンジできた体育など。ここではとても書ききれません。



いつでもどこでも安心して過ごすことができる中学校が、幹太は大好きでした。私たち家族も、そんな幹太の姿を見ることができ、本当に幸せいっぱいこの3年間でした。幹太は「もうすぐ中学校ともお別れだねえ。なんだかさみしいよぉ」とよく言っています。

みなさんにももらった、たくさんのステキな思い出とたくさんの勇気を胸に、これからも幹太らしく生きていきます。そして、これから幹太が過ごすそれぞれの場所で、中学校と同じように幹太が幹太らしく居られる場所「安心できる居場所」を築いていけたらと思っています。幹太は4月から特別支援学校に進学します。次は電車に乗る練習です！1人で電車に乗って堂々と通学できるように頑張りますね(^♪)

みなさんが想ってくれていたのと同じように、幹太も、中学校で出会ったみんながこれから先も幸せ一杯の毎日が続くように心から願っています。

3年間、本当にありがとうございました。みんなのこと、ずっとずっと大好きです。

幹太の母

※ 作者のご了解を得て掲載しています。



目次

第1章 計画の策定にあたって

1	計画策定の趣旨	6
2	計画の位置付け	8
3	対象期間と政策評価	10
4	計画の対象	11
5	推進体制（国・県・市町等の役割）	12

第2章 兵庫県がめざす姿

1	私たちがめざす“未来予想図”	16
2	2026年の目標	17
3	基本理念	18
4	計画の横断的視点	20
5	計画で整理する施策分野	24

第3章 各分野における取組

1	「ひと」分野	26
2	「参加」分野	32
3	「情報」分野	36
4	「まち・もの」分野	40

第4章 参考資料

1	障害保健福祉圏域	46
2	兵庫県障害者福祉のデータ	48
3	策定経過	61
4	兵庫県障害福祉審議会名簿	62
5	用語解説	64
6	参考法規	72

障害の表記について

本計画では、文中の全ての箇所で「障害」の表記を用いています。これは、兵庫県障害福祉審議会において当事者の方々を交えて議論したところ、「害の字をほかの漢字やひらがなに変えることは、障害のある人が生活する上での様々な社会的障壁があることに対する社会全体としての認識・理解（社会的障壁の除去は社会の責務）をかえって曖昧にしてしまう」という意見が大勢を占めた結果を踏まえたものです。

将来は「障害」に代えて適切な言葉が使われ、障害者という呼称自体がなくなるべきと考えます。

しかし、それまでの間は「障害」の表記を用いることで「障害の社会モデル」の考え方を踏まえつつ、全ての人が社会で当たり前に行生活できるように、施策の充実や差別解消のための啓発に努めていきます。